

巡りめぐって — ケニアや自分との出会い —

先日、書架を整理していたら30年ほど前に書いた雑文がでてきました。拙い文章で綴られたものを読み進むと、気恥ずかしさを覚えながらも若いころの自分に再会したような気持ちになりました。回想録のようなものを書くにはまだ若いのですが、このような再会もエッセイの主題であろうと思い直し、自分自身にエールを送るつもりで雑文をもとにこの記事を書きます。そして、このエッセイを手にとった方々が、もしかしたらアフリカやアジアでのフィールド研究を志すかもしれないという期待も込めます。

私は、大学を卒業した年に青年海外協力隊に参加し、日本の援助でつくられた大学の土壌肥料学担当の教員としてケニアに派遣されました。1983年のことでした。当初は2年間の派遣予定でしたが、2回の延長を挟んで、3年半を過ごしました。そこでは、人びとやそこでの暮らし、自然とのさまざまな出会いがありました。任期を終え帰国してから、大学院に進み、土壌や農耕技術の研究に取り組みました。でてきた雑文は、自分がどのような道を歩むのかも分からないこの時に書いたものです。

行き詰る

私が最初に学んだのは、「温帯の常識は、時として熱帯では非常識」ということでした。例えば、日本では堆肥などの有機物を与えることは、土壌を柔らかくし、通気性や保水性を高め、作物の生産を増やすことに役立つとされ、農学や土壌学の教科書にも書かれています。ところが、ケニアの大学の教壇に立っていたある日、堆肥を使うことの意義を説明していたら、年降雨600mmの村から来ていた学生が言いました。「先生、堆肥を畑に入れると土が乾いてしまって作物がうまく育たないことがあります」と。別の学生は、「畑に有機物を入れるとシロアリが巣を作るといわれています」。学生たちからの指摘は、温帯の土壌学や農学を学んできた新米教員にとっては、とても新鮮でした。

赴任から半年が過ぎた頃、微熱に悩まされるようになりました。朝はなんともないのに、職場に入ると体調が悪くなるのです。原因は、精神的なものであることは知っていました。大学を卒業したばかりの私にとって、自分が学んだ知識が通じないことへの焦燥感や、得意でもない英語で専門科目の講義をすることへのプレッシャーが積み重なったのです。現地の大学の同僚でもあった専門家諸氏から、旅に出ることを奨められました。未知の土地に来ているのだから、雑多

な知識で一杯になった頭であれこれ考えるよりは、「皮膚感覚を大事に下さい」と。

旅に出て風と人と土を感じる

私は、旅に出ることにしました。大学は3学期制で、3カ月間の学期を終えると1カ月間の学休期間がありました。この1カ月を授業の準備や報告書の作成、実験室の整備、自己研修などに使うことができました。最小限の着替えや2枚のベッドシーツ、カメラ、水筒などを中型のリュックサックに詰めて、大学の傍にある幹線道路に立ち、目的地も定めず当てずっぽうに「今から5台目」と決めて、通りがかったバスやマトツ（小型の乗り合い自動車）に乗り込みました。終点まで行き、日があるうちはさらに別の車を探しました。旅客用の車がないところでは、物資を運ぶトラックの荷台や幌の上に乗ることもありました。小さな町や村に夜遅く着くと、乗客の誰かがお家に泊めてくれました。車が故障すると、道端に止めた車の下に潜り込みシーツに包まって野宿することもありました。

ケニアはヤシの葉が汐風にそよぐインド洋岸から、乾いた熱風が吹き抜ける半砂漠、象の徘徊する鬱蒼とした森林、そして氷河を頂く山岳まで、赤道直下の国でありながらあらゆる自然があり、そこに多様な民族の文化や暮らしがあ

りました。とくに、北東部の半乾燥地の村々は、ソマリアやエチオピア南部の影響が色濃いせいか、普段ケニア中部の高原で暮らしていた私にはエキゾチックに映りました。質素な白壁のモスクから流れるコーラン、彫り深い顔立ちと鋭い目の人びと、涸川沿いに途切れがちに連なるアカシアの淡い緑の帯、水場に向かうラクダの群と巻き上がる砂塵などなど。遠くインド洋から風が吹きつける夜には、心地よい眠りの中で、強い日差しに忽然と浮かび上がる風景の断片を^{はんすう}反芻することもありました。

ケニアの人びとは人懐っこく話好きでした。英語や片言の民族語で、訪れた土地や暮らしの話を聞き、畑や井戸、作物、家畜などを見せてもらったり、熱い甘いチャイ（ミルクティー）やウガリ（トウモロコシの粉でつくった固い練り粥）をごちそうになったりしました。年配の農民や牧畜民は、それぞれの^{なりわい}生業について面白おかしく語り、土壌や家畜糞の扱い方も丁寧に教えてくれました。専門知識や用語を使わなくとも、普段つかっている言葉で、科学的な知識やその本質が表現できることを知らされました。

何度かの旅を経験し、多くの学びとともに、微熱や体調不良はいつの間にか治っていました。

ぼんやりとした違和感

半乾燥地への旅で感じたのは、気まぐれで時として不毛とも思える苛酷な自然環境の中で、人びとの生存を可能にしている牧畜民の生活技術の確かさでした。その一方で、現地政府や援助機関による取り組みが、その土地の人びとの想いとは無関係に進められ、声無き牧畜民が緩慢に衰退の途をたどっているのではないかと思えたこともありました。当時、国際機関が主導していた牧畜民の「定住化」の事業がその典型的な例です。彼らが長年営んできた移動を伴う生業が不規則に変動する半乾燥地の気候に優れた適応性をもつという本質や意味を、援助案件を進める側が理解していないと感じたのです。

ある時、北西部にあるトゥルカナ湖に行きました。そこでは、南岸のエルモロと呼ばれる人びとの集落を訪ねました。そこに住む人びとは、かつて「九十九人部族」と呼ばれていたそうです。真偽はわかりませんが、辛うじて生える草で山羊を飼い、湖での漁労で得られる食糧に限りがあるため、100人目が生まれると共倒れを防ぐのに間引きをし、常に人口を一定に保ったことに由来すると聞いたことがありました。この村を訪ねて驚いたのは、集落のはずれに独りで住むお婆さんが黄色いトウモロコシのゴミ取り

をしているのを見た時でした。黄色いトウモロコシは援助物資であることを意味します（ケニアでは白が主流で、黄色のものは好まれない）。食糧援助と魚網・ボートの供与により、食糧事情に劇的な変化が起こっていました。

私がそこを訪れたのは、アフリカが大干ばつに見舞われた1985年の1年後でした。援助する側にとっては、緊急措置だったかも知れません。その時の援助物資を残し、大切に食べているお婆さんの姿を思い起こすと、薄っぺらな援助批判をするつもりにもなりません。しばしば飢餓に直面する地域への食糧援助を否定するものでもありません。とはいえ、「何故黄色いトウモロコシだったのか？」というぼんやりとした違和感は、今も心のどこかに残っているのです。

77

ケニアへ、再び

その後、短期出張や家族旅行で何度かケニアを訪れる機会がありましたが、じつくりと村落に入ることはありませんでした。そんな中、2016年に知り合いのフランス人研究者の誘いを受け、リフトバレー州にあるマサイの人びとの集落にお世話になる機会がありました。

そこは、地熱発電所の開発とマサイの人びとの伝統的な暮らしとがせめぎ合っている地域で

した。アフリカ大陸の東部を南北に貫くグレートリフトバレー（大地溝帯）には、多くの火山や間欠泉（一定の周期で水蒸気や熱湯を噴出する温泉）が分布し、その地下に眠る地熱を利用した電源開発が進められています（写真①）。ここでの地熱発電は、1981年に日本の援助により始まったアフリカで最初のケースでした。近年、各国が地熱発電事業に加わり、開発ラッシュとなっています（写真②）。石炭・石油や原子力に頼らず、温室効果ガスの1つである二酸化炭素

の発生が少ない再生可能エネルギーとして注目される地熱発電ですが、その陰で、マサイのんびりが立ち退きを余儀なくされていることを知る人は少ないでしょう。

地熱を取り出す井戸（写真③）からは、ものすごい騒音が出ます。そのため、周辺の数kmの範囲に住むことは難しくなります。また、蒸気を取り出す井戸からは重金属を含んでいそうな色をした排水が出ます（写真④）。発電事業者や政府機関は決して認めませんが、排水が流入した



写真①リフトバレーにつくられた地熱発電所



写真②深さ2000mの井戸を掘り熱源を得る



写真③地熱を取り出す井戸



写真④蒸気を取り出す井戸からの排水

80



写真⑤斜面地につくられた移住地



写真⑥朽ち果てるかつての住居

水たまりで水を飲んだウシが死んだとも噂されています。そこに住まうマサイの人びとの争いを避けるためか、政府や世界銀行などの支援により新たな移住地がつくられています(写真⑤)。火山の外輪山の斜面につくられた移住地には、土壌侵食によってできた大きな裂け目が、与えられた家のすぐ近くまで迫っています。家畜に与える十分な水がないため、移住したマサイの人びとは命よりも大切と言われるウシを手放し始めています。朽ちてゆくのを静かに待つかつ

ての集落の佇まいは、移住を余儀なくされ緩慢に伝統的な暮らしや生業を失いつつあるマサイの人びとの姿と重なります(写真⑥)。1980年代にケニアの半乾燥地を旅していた頃に感じた、ぼんやりとした違和感が再びよみがえってきました。

昔ながらのマサイの暮らしが残る地域に、ほんの数日だけ滞在しました(写真⑦)。お世話になったお家のご主人から、現在のマサイの暮らしやそれが将来どのように変わっていくかとい



写真⑦泊めてくれたご家族と研究仲間たち

う話を聞きつつ、地熱発電開発と追いやられたマサイの人びと暮らしに想いを馳せました。かつての自分だったら、「開発vs 弱い立場の人びと」という認識に立って思考を巡らせたかも知れませんが。しかし、このような二項対立の構図からは、うまい解決策が見つからないとも思っています。地熱発電開発の向こう側には、その電気を使う人びとの暮らしの風景が見えます。これらを対立的に捉えるのではなく、両立させる方法はないのだろうか。アフリカやアジアで農業や地域開発の研究に取り組む自分に、新しい宿題

ができました。そしてそれは、かつての自分が抱いたぼんやりとした違和感を解くための、巡りめぐって再び現れた古い宿題でもあるのです。

遠くに人の笑い声のようなハイエナの声や近くを歩き回るヤギの群れからの鈴の音を聞き、あれこれと考えるうちに夜が明けました。ウシ囲いのなかでゆっくりと反すうするウシと目が合った時、こんな声が聞こえた気がしました。「大丈夫、答えは足元にあるよ」と。

田中樹



写真⑧穏やかな表情のウシたち